

『枕草子』「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」段における清少納言自詠歌の機能

同 免 木 利 加

一、はじめに

『枕草子』を丁寧に読み解いてゆく時、作者が「書く」という行為に対して自覚的であることにいつも驚かされる。殊に日記的章段は、ただ身辺雑事を気の向くままに並べ立てているわけではなく、構成を考えた上で書きはじめ、必要なことを述べてから書きおわる、という姿勢が顕著に見られる。そこにはストーリー性があり、読み手に伝えたいテーマがある。繰り返しになるが、それらは偶然に生まれたものではなく、そう読みとれるよう作者が意図的に配置し、書き上げたものなのだ。

『枕草子』と聞いて最初に思い浮かぶのは、和歌や漢詩文の一編を適切な時に引用し、褒めそやされる清少納言自身の姿を描いた「自賛譚」であろう。しかし、『枕草子』上で彼女は常に賛辞の対象にあるわけではない。誰かの引用ではなく、彼女自身が和歌を詠む時、清少納言は賛辞を受けることなく、無反応であったり、笑われる破目に陥ったりするのである。ただそれは、単に笑

われる自分の姿を描いて終わっているわけではなく、道化役として自分を下げることで、主君である中宮定子を一層高く持ち上げているのだ。(註一)

本稿では、一般に「雪山の段」と呼ばれる「職の御曹司におはしますころ、西の廂に(八三段)」を中心に考察し、清少納言自詠歌が定子賛美へと繋がる構造を見てゆきたい。

なお、『枕草子』本文・章段番号の引用は石田稔二訳注『枕草子』(一九七九年八月 角川ソフィア文庫)に拠る。

二、清少納言と「常陸介」

雪山の段は、職の御曹司につくられた雪山がいつまで残るかという賭けに、一人だけ「一ヶ月残る」ほうに賭け、前日まで賭けに勝てると有頂天だった清少納言が、当日に突如として雪山が消えたため、一転して敗者になってしまうというあらすじである。しかもそれは定子の画策した悪戯であったことが後に知れる。清少納言は定子と御付の女房たちに笑われ、一条帝にもからかわれ、

章段の最後に「いとと憂くつらく、うちも泣きぬべきこちぞずる。」と「己」の心情を綴っている。

この段の最初には、「常陸介」と呼ばれる女法師が登場する。彼女は尼でありながら「はなやぎ、みやびやか」な様をしていること、卑猥で滑稽な歌や踊りを得意とすることから、清少納言を初めとする定子サロンの女房たちに「笑ひにく」まれる。その後、清少納言たちが別の謙虚な尼に衣を与えているのを見て嫉妬したらしく姿が見えなくなり、話題が雪山に移ってからはしばらく登場しない。雪山が少し小さくなった頃に再び現れた常陸介は「うらやまし足も引かれずわたつ海のいかなる人に物賜ふらむ」と詠み、再び「にくみ笑」われ、「人の目も見入れねば、雪の山に登りかかづらひありきて去ぬる」後、章段の後半では全く姿を見せなくなる。

この常陸介の、段の最初に登場しながら後半は全く章段の流れと関係無くなるという描かれ方は、「枕草子」日記的章段の構成の稚拙さを表わすものとして捉えられてきていた。常陸介の描写に意味を見出したのは河内山清彦「枕草子」雪山「の段の構成」

(註二)である。常陸介と清少納言の共通点として「あまり物怖じせず、頭の回転が早いこと」「女房たちに憎まれ反感を抱かれながらも、同時にある種の人気があり、かつ彼女自身も人気の中心にあることが好きで、特別扱いを受けたがっていること」の二点を挙げ、また段の構成の上からも、

①その過程において、自己中心的で(前述の性格にもとづく)、しかもそれが際立って得意な状態にあった点。常陸介はその才覚(?)によって女房達の「御得意」であることに有頂天になり少々図にのりすぎたらいがある。それで自分を特別視したため、他の尼乞食が自分と同じように頂きものをするのに我慢がならなかった。一方、清少納言も、並はずれた予想をたて、その実現のみを心にかけ、周囲の状況を考慮する余裕をもっていない。②結末において、ともにあてが外れたというか、失望落胆の状態で終っている。おそらく常陸介は、姿を見せないと女房たちが自分をなつかしがり存在価値を思い知るだろうと踏んだようで、しばらくあらわれない。そして、ひさしぶりにやってきて、自分の心中をよんだ和歌を披露する。これによって再び集めることができると思ったようだが、結果は、これまでよりいっそう憎まれ相手にされなくなってしまう。清少納言も自己の勝利をはなばなく飾る計画を粉碎され「あさまし」「いとと憂く、つらく、うちも泣きぬべき心地」といった感情をしっかりと味わされたのであった。

という共通点があることを述べている。また、そのように清少納言と共通点を持つ常陸介をこの段に登場させた理由については、②として結末の類似性について指摘したけれども、と同時にそこには微妙な相違が存することにも留意すべきであろう。すなわち、常陸介は準備していた和歌を唱うように詠じ出し、その

結果女房たちに徹底的に嫌厭され憎まれながら姿を消してしまつた。その後二度と職の御曹司に足を運んでいない。しかし、清少納言は雪山がくずされたため、「をかしうよみ出でて、人にも語り伝へせんとうめき誦したる歌」を発表する機会を失つてしまつたのである。これが最も服膺すべき肝心な相違点である。

もし、中宮の牽制に会わずに清女の計画通り麗々しく事が進んだならば、彼女はどうなつていたであらうか。望みどおり宮廷貴族の話題にはなつたであらうが、その評判が高まれば高まるだけ、その踏台にされたかたちの他の宮廷女房たちは不快な思いを強め、清少納言を憎み、彼女は決定的に孤立したのではないだらうか。それは、和歌を詠じ出して「にく」まれ黙殺された常陸介の姿にあまりに似ていないだらうか。（中略）中宮定子はたぶんその間の事情を十分に諒解して、「かう心に入れて思ひたることをたがへたれば、罪得らん」と覚悟したうえで、清女の勝利を目前にして雪山を取り捨てさせたのである。

というように、雪山を取り捨てた定子の行動は、清少納言が疎まれ、孤立するのを避けるためのものだったとしている。このような考え方は、池田亀鑑『全講枕草子』（註三）で、

問題は、なぜ作者がこれほどに「憂くつらく、うちも泣きぬべき心地」がしたのか、また中宮は何ゆえに雪をかき払わせられたのか、文章は、「勝たせじと思しけるなり」という主上のお

詞で終つてゐるが、それはどんな意味か、という点にあるであらう。これらの問題について、作者は何の説明も加えていない。それは読者の心々に任されている。本書の著者としては、主上のこれらのお詞の意を重くみたい。すなわち、中宮は清少納言を真実にあししておられればこそ、これを勝たせまいとされたのではなからうか。雪が十五日まで保つた時の清少納言の得意さ、従つてその場合の周囲の人々の羨望・嫉視、それらは清少納言自身に、どんな益ももたらさないであらう。この深い思慮と愛情が、そのままに清少納言に感じとられずにはいない。作者は身の浅慮を恥じ、中宮の限らない厚情に感謝して、その回想を、ここに詳細に書き綴つたのではないだらうか。雪の山の段は、決して作者自らを誇示する自讃の話ではない。これもまた、中宮に対する限らない思慕と感謝との結晶として考えるべきものである。（一九二頁）

とされて以来、広く支持されているようである。

三、孤立する清少納言

確かに清少納言は、過去に定子サロンから孤立したことがある。『殿などのをはしまさで後（一三八段）』に描かれている時期である。一三八段の史実年次とされる長徳二年（996）は、前年に定子の父である道隆が病死し、政権が道隆の弟である道長に移り、定子の兄弟である伊周と隆家が大宰府権帥、出雲権守にそれぞれ

れ貶され、罪人の兄弟を持った定子は、宮中には居られず二条の宮に遷御し落飾するが、二条の宮は遷御後わずか二月足らずで焼失、母方の叔父である高階明順の邸へとさらに移ることとなる。一三八段によると、この時期の清少納言は、

御けしきにはあらで、さぶらふ人たちの、左の大殿方の人知る筋にてあり」とて、さし集ひものなど言ふも、下よりまゐるを見ては、ふと言ひやみ、放ち出でたるけしきなるが、見なはず、にくければ、(宮)「まいれ」など、たびたびあるおほせ言をも過して、げに久しくなりにけるを、また、宮の辺には、ただあなた方に言ひなして、そら言なども出で来べし。

というように、「左の大殿」、左大臣道長と親しくし、内通しているという噂をたてられ、居たたまれなくなり里に長く篋っていたようである。実際に彼女が道長方と内通していたかどうかは定かではないが、疑われるだけの材料が揃っていたことは間違いない。この里居の時期を題材にした章段は他に「里にまかでるに(八〇段)」があるが、この時に己の居所を教えていた人間として「左中将経房の君」「済政の君」「左衛門の尉則光」の三名の名が挙がつており、彼らは全て道長方と親しいと言えるのである。源経房は道長の猶子のような間柄であり、源済政は道長の正妻倫子の甥にあたる。橘則光は清少納言のかつての夫であるから居所を知らせても当然であると言えなくもないが、失脚した伊周の後を襲った藤原齊信の郎党である則光は、定子サロンから見て近し

い人間とは言えない。

さらに、「関白殿、黒戸より出でさせたまふとて(一二五段)」において、清少納言は道長について定子に「かへすがへす聞」え、定子に「例の思ひ人」と笑はせたまふ」という反応をされたことがあり(註四)、清少納言が道長風流であつたことは彼女自身が認めているのである。道隆生前も没後も、変わらず定子に仕えた清少納言であるから、道長風流と言つても飽くまで「定子の叔父、道隆の弟」であることを前提として道長を「思」つていたのだろうと考えるのが妥当であるが、道長が中宮大夫を務め明らかに道隆の力が道長に上回つていた一二五段当時ならばともかく、その勢力が逆転してしまつた一二三八段においては、「左の大殿方の人、知る筋にてあり」と後ろ指をさされるに十分な理由であつただろう。

しかし、雪山の段はどうか。清少納言は定子に対する裏切り行為を働いたわけではない。ただ雪山の賭けなどという取るに足らないものに、「白山の観音、これ消えさせたまふな」など折るもの、もの狂はし。「今日、二日も待ちつけと、夜も起きゐて言ひ喚けば、聞く人も、もの狂はしと笑ふ。」と、「もの狂はし」いほどに熱中しただけである。それだけのことで仲が崩れるほど、定子サロンというのは幼い集まりであつたのか。一三八段の出来事で一度信頼が薄れたから、清少納言は簡単なことで孤立してしまうようになったのか。それはやはり逆うであらう。しかし、清少

納言と常陸介が非常に似通った描写をされていることもまた間違いないまい。それでは、その対比は何のために為されたのか。

四、一条帝中宮としての定子賞賛

三田村雅子「枕草子 表現の論理」(註五)が、「この雪山の段は(中略)深屈の主題は中宮定子の宮廷復帰という大事件であったに違いない。(二六二頁)」とするように、この定子の宮中復帰は清少納言が描きたかった、一人でも多くの人に知らしめたい、彼女にとっての「真実」だったことであろう。

賭けの決着する一五日、里居の清少納言は己の敗北を知り、「夜のほどに、人のにくみて取り捨ててはべる」と定子に文を書く。二〇日に宮中に昇った清少納言は事の真相を聞かされることとなる。ここで定子の口から、

「上もきこしめして、(帝)「いと思ひやりふかくあらがひたり」など、殿上人どもなどにも、おほせられけり」

という言葉が発せられている。その後、清少納言が猶も悔しがっている、一条天皇がやってきて、

上もわたらせたまひて、(帝)「まことに年ごろはおぼす人なめりと見しを、これにぞ、あやしと見し」など、おほせせらるるに、いとど憂くつらく、うちも泣きぬべきこちぞする。

と、帝の仰せごとに最後まで嘆く清少納言の姿が描写されているのだが、このように章段の最後になって、一条天皇の言動が描か

れることには意味があると考えるべきであろう。

中関白家全盛期と異なり、長徳四年(988)一二月から五年(正月一三日に改元して長保元年)正月までを描いた八三段は、史実の上では暗い色が定子を覆っている。一条帝の父である円融院は既に亡く、母の東三条院詮子は定子の父道隆と仲が悪かったため道長を偏重した。この年の十一月には道長の長女彰子が入内することとなる。全ては定子にとって好ましくない方向へ動いていたと言っても過言ではあるまい。しかし、「枕草子」の、八三段の定子はそのような翳りを一切見せることなく、清少納言を騙して一条帝とともに「いみじく笑はせたま」うている。まるで、全盛期の頃と今と、何の変化も無いかのように。

定子と一条帝の変わらない関係を描き出し、彼らを賛美するために必要な道化師役を、常陸介から清少納言が受け継ぐこととなる。この二人の入れ替わりを表すかのように、清少納言の「ここ」にのみめづらしと見る雪の山所々にふりにけるかな」の歌と、常陸介の「うらやまし」の歌は前後して登場している。

五、雪山の段の構造

職の御曹司に作られた雪山に関する描写の順序に注目したい。

二十日のほどに雨降れど、消ゆべきやうもなし。すこしたけぞ劣りもてゆく。「白山の観音、これ消えさせたまふな」など折るも、もの狂はし。

さて、その山作りたる日、御使に、式部の丞忠隆まありたれば、函さし出して、ものなど言ふに、「今日、雪の山作らせたまはぬ所なむなき。御前の壺にもつくらせたまへり。春宮にも、弘徽殿にもつくられたり。京極殿にも作らせたまへりけり」など言へば、

(清少) ここにのみめづらしと見る雪の山所々にふりにけるかな

と、かたはらなる人して言はすれば、たびたび傾きて、「返しは、つかうまつりけがさじ。あざれたり。御簾の前にて、人にを語りはべらむ」とて、立ちにき。歌いみじう好むと聞くものを、あやし。御前にきこしめして、(宮)「いみじうよくとぞ、思ひつらむ」とぞ、のたまはする。

つごもりがたに、すこし小さくなるやうなれど、なほいと高くであるに、昼つ方、縁に人々出で居などしたるに、常陸の介出で来たり。(清少)「なにと久しう見えざりつる」と問へば、(常陸介)「なにかは。心憂きことのはべりしかば」といふ。(清少)「なに事ぞ」と問ふに、(常陸介)「なほかく思ひはべりしなり」とて、長やかに詠みいづ。

うらやまし足も引かれずわたつ海のいかなる人に物賜ふらむ

と言ふを、にくみ笑ひて、人の目も見入れねば、雪の山に壹りかかづらひありきて去ぬる後に、右近の内侍に(清少)「か

くなむ」と言ひやりたれば、(右近内侍)「などか、人添へては賜はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山まで登りつたひけむこそ、いとかなしけれ」とあるを、また笑ふ。

さて、雪の山つれなくて、年も返りぬ。

まず雪山を作った日の出来事が描かれ、その後にはそれから数日後の雪山と清少納言の様子が語られる。しかしその次には、「さて、その山作りたる日」と、時系列を無視して日にちを再び雪山を作った日に戻し、清少納言が「ここにのみ」の歌を詠む姿が描かれる。そしてその次には常陸介が登場して歌を詠む年末の或る一日が描写されているのである。これは、清少納言の構成力の欠如と見る説もあるようだが、清少納言の「ここにのみ」の歌を常陸介の歌「うらやまし足も引かれずわたつ海のいかなる人に物賜ふらむ」と意図的に並べて書くための操作であると考えたい。

まず、清少納言の詠んだ「ここにのみ」の歌に対する式部の丞忠隆の返答であるが、歌を返すことはなく、「返しは、つかうまつりけがさじ。あざれたり。御簾の前にて、人にを語りはべらむ」と述べて去ってしまう。これは一見憂められているようにも読めるが、前掲『枕草子 表現の論理』が「その雪山への余りの思い入れに閉口した式部丞忠隆によって返歌を拒まれてしまっているのである(一三三頁)」、萩谷朴『枕草子解題』第二巻が「清少納言の詠歌を必要以上に賞讃して、返し歌を詠む責任をのがれようとしている下心(二八〇頁)」「(註六)とするように、実のところは、

「雪山が融けずは何日もつか」という賭けに熱狂する清少納言に付いて行くことの出来ない気持ちの裏返しに「返しは、つかうまつりけがさじ」以下の言葉だったのである。しかし、飽くまで真剣に雪山に熱中する（語られる清少納言）は「歌いみじう好むと聞くものを、あやし」と思うだけで、忠隆の言葉の裏の意味には気づかない。その出来事を聞かされた定子が「いみじうよくとぞ、思ひつらむ」とあてこすっていることにも気づかない。当然、「枕草子」作者としての清少納言はこの擦れ違いに気づいた上でこの場面を描写しており、（語られる清少納言）の道化としての役割は、既にここから始まっているといえる。また、雪山を作った当日から清少納言がこのように道化化していることを読み手に不自然に思わせないため、この当日の描写は、「もの狂はし」いほどに雪山に熱狂している「二十日のほど」よりも後に描写され、その続きであるかのように読ませるよう仕掛けられているのだ。これが日にちを逆に描写した二つ目の理由である。

もし読み手が忠隆や定子の言葉の裏の意味に気付かなかつたとしても、「ここにのみ」の歌は『拾遺和歌集』にも採られた源景明の「宮にてめづらしと見る初雪は吉野の山にふりやしぬらん（冬・二四三）」を明らかに踏まえたものであり、清少納言が「枕草子」中に得意なものとして描く、和歌の改変に近しいものと思わせる。この歌が褒められたのは有名な歌を引いたからだ、という言い逃れが可能になるのだ。自詠歌が真正面から賛辞される様

は「枕草子」中に「例も描かなかつたが、引用や改変によって様々な人から褒められる」「自賛譚」を多く描いた彼女は、外からの権威付けが無ければ自身を肯定的に描く事が出来なかつたのかもしれない。

その数日後、常陸介が現れて歌を詠む。清少納言の「ここにのみ」と比べ、技巧を凝らした面白い和歌ではあつたが、『古今和歌集』や『伊勢物語』に見える小野小町の和歌「みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる」を本歌とし、自身を小町になぞらえているという出すぎた真似をしたため、定子サロンの女房たちは「にくみ笑」って相手にしない。以後常陸介は姿を見せなくなり、代わりに清少納言が、それまで常陸介が担っていた道化役を背負わされることとなるのである。章段の前半では、確かに「笑ふ」側であつたはずの清少納言は、ここでの描写を切つ掛けに常陸介の役割を引き継ぎ、定子たちに「笑はれ、読み手に「笑わ」れる存在へと変わって行く。「笑ふ」者から「笑はる」者への落差を広げるため、清少納言は常陸介と立場を逆転されねばならないのだ。

六、おわりに

この章段が、

「勝たせじとおほしけるななり」とて、上も笑はせたまふ。
というように、一条天皇の笑顔で終わっていることは、繰り返し

になるが大きな意味を持つ。政局によって長く引き裂かれたままであった一条帝と中宮定子が、久しぶりに出会えたのだとは思えないほど自然に寄り添い、笑っている。その幸福な一日を描きたいがために、清少納言は自身を道化師としてこの章段に登場させたのだ。全身全霊を賭けていた雪山は取り払われ、周囲の人間に笑われ、(語られる清少納言)はまさに道化師の名に相応しい貶められようである。だがその泣き顔の裏で道化師は、己が創りあげた幸福な一日に満足していたであろう。そのためにこそ、この章段は書かれたのだから。

註

- 一、拙稿「枕草子」日記的章段における清少納言自詠歌の機能 ―「宮にはじめてまありたるころ」段を中心に― (『岡大國文論稿』第三四号 二〇〇六年三月) を参照されたい。
- 二、本稿で取り上げた部分は「枕草子 表現と構造」(一九九四年七月 有精堂出版) 九〇頁以降。また、この論文の初出は「解釈」一九七六年三月号。
- 三、池田亀鑑『全譯枕草子』(一九六二年二月 至文堂)
- 四、この「思ひ人」が道長ではなく道隆を言うとする説が萩谷朴「枕草子解説」三卷(一九八二年一月 同朋社出版) 一三九頁に見えるが、ここでは通説である道長とする説を採る。
- 五、三田村雅子「枕草子 表現の論理」(一九九五年二月 有精堂出版)
- 六、萩谷朴「枕草子解説」二卷(一九八二年三月 同朋舎出版)

(どうめんきりか 岡山大学大学院文化科学研究科)

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅳ

- 言語表現研究 (兵庫教育大学言語表現学会) 二四
- 言語文化 (一橋大学語学研究室) 四四
- 言語文化学研究 日本語日本文学編 (大阪府立大学人間社会学部言語文化学科) 三
- 言文 (福島大学国語教育文化学会) 五五
- 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要 (神戸女子大学古典芸能研究センター) 一
- 語学教育フォーラム (大東文化大学語学教育研究所) 十六
- 語学と文学 (群馬大学語文学会) 四四
- 国語学研究 (東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会) 四七
- 国語教育論叢 (島根大学教育学部国文学会) 十六、十七
- 国語国文学 (福井大学言語文化学会) 四七
- 国語国文学 (別府大学国語国文学会) 四九
- 国語國文學會誌 (學習院大学國語國文學會) 五一
- 國語國文學報 (愛知教育大学國語国文学研究室) 六六
- 国語国文学誌 (広島女学院大学日本文学会) 三七
- 国語国文学研究 (熊本大学文学部国語国文学会) 四三